

自然史系の充実した仙台市科学館

仙台市科学館 副館長（学芸員） 佐々木 隆

仙台市科学館という名前からは理工系の博物館というイメージは持てても、自然史系まで扱っている自然科学系総合博物館であるとはなかなか思い浮かばないのではないかと心配をしています。1990年に現在地の台原森林公園に新築移転する際に名称をどうするか議論になりましたが、博物という言葉に偏見があって、いままで通り(旧館のまま)踏襲することになりました。旧館とは、青葉通りと国道4号線が交差する街のど真ん中に1968年から開館していた科学館です。その前身が1952年に斎藤報恩会自然史博物館に隣接するレジャーセンター内に開設されたサイエンスルームです。

地質業協会誌に掲載ということ意識して全体像の紹介ということではなく、敢えて自然史系中心の施設紹介をします。理工系・生活系展示室などの科学館らしいところは来館されれば理屈無しで楽しめるので省くことにします。

建設予定地が、地滑りの疑いがあるため念入りな地盤調査が行われたので地質の資料が残り、活用がはかられています。施工面でも連続地中壁杭という基礎や二重の人工地盤づくりなどみるべきものが多くあります。

60haの広さと豊かな自然環境を有する森

林公園に銀色のステンレスパネルと熱線放射ガラスの組み合わせの斬新なフォルムが映える建物は仙台駅舎を凌駕する高ささと長さとなっています。設計のコンセプトは、人と自然と科学を力強く結ぶ科学の橋です。

展示室はスーパーフレームモジュールを採用して無柱の大空間を実現しました。

設備もエスカレータ・エレベータ・自動ドアや天井内システムから消火栓までもシースルー化されています。これらは建築物もサイエンスであるという思想に基づいています。

自然観察園・岩石園・科学遊園・気象観測用露場などの屋外施設も整備されています。

では、エントランスホールからご案内いたします。1階のつもりで入ったエントランスホールが3階であったり、27.6mのスパンと12mの天井高でシンボリックな空間をつくりだしていて、そのまま自然観察デッキに出ると森林公園が眼下に一望できます。ホールの床はインパラブラックという石材で南アフリカのラステンバーグ産です。約20億年前の先カンブリア時代のブッシュベルト複合岩体のうちの複輝石斑れい岩です。

エスカレータで4階に行くと最初の部屋が自然史系の展示室です。八木山動物公園

にいた雄のアフリカゾウのダンの全身骨格が出迎えてくれます。そのうしろにはマンモスゾウとナウマンゾウの全身骨格が続き、シンシュウゾウとセンダイゾウの生体復元(実物大)レプリカ、そして再びシオガマゾウとアングスチデンスゾウの全身骨格が並んでいます。7人の侍ならぬ7頭の古象の大行進です。ゾウがどのような進化をたどってきたのかが分かるだけでなく、2000万年前から現在までのそれぞれの時代の指標ともなっていて、各時代の生き物や環境を考える糸口になっています。

古い時代の北上山地形成時代のコーナーでは、北上と阿武隈山地から産出した三葉虫が33種も実物展示されています。さらに、日本最古のデボン紀のアンモナイト類やヘリコプリオン・ヘリカンポーダスなどの軟骨魚類の歯など21点ほどがケースに収められています。デボン紀のアンモナイト類 *Platyclymenia* sp. のように新館開館以降追加展示されたものとして、ダンの骨格標本、アケボノゾウの頭骨標本、青葉区芋沢唄坂産の大年寺層化石(22点)、本邦初のハリテリウム亜科(海牛目)の臼歯、幻の化石チヨダニシキ2点、日本最古のセイウチ *Prototaria* sp. など数え切れません。

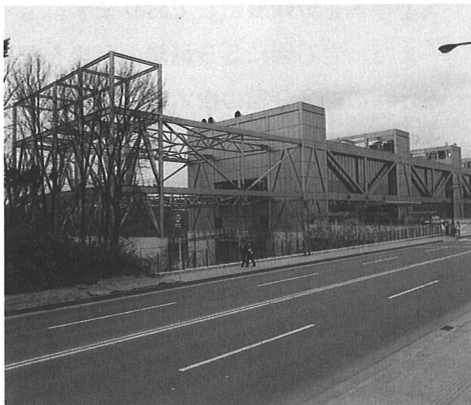
鉱物の三大コレクションとして山岡・吉川・久我コレクションがあって、その一部を3階の生活系展示室の中央にある woods コーナーに展示しておりましたが、1か月ぐらいの周期で次々とミニ企画展を開く場として明け渡したために現在はお蔵入りの状態です。「鉱物の色と条痕色」のコーナーで41点ほどの鉱物標本とそれぞれの条痕を示しているだけです。岩石については、

「岩石がいっぱい」のコーナーに88種の大型標本を分類展示しております。

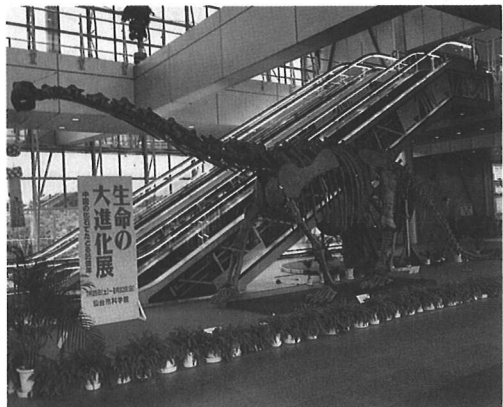
また、岩石園に35種類の巨岩を配置すると共に、29種の樹木を2本ずつ植栽しました。常緑のセコイアと落葉性のメタセコイア・ヌマスギなどを組み合わせるなどかなり仙台付近の植物化石を意識した樹木の選定となっています。岩石については、流紋岩など若干の岩石を補充したいと考えています。

1階の図書資料室で一番充実しているのは地学関係の部門です。中でも、花粉を含む植物化石関係、有孔虫・貝形虫などの微化石関係の文献が目につきます。学会誌も日本地質学会・日本古生物学会・地学団体研究会・日本岩鉱学会ほか応用地質学会関連のバックナンバーもほぼ揃っております。個人でこれらの文献を保存するのは容易なことではありません。私も定年の際には科学館に寄贈する予定にしております。読者の皆様におかれましても、将来身近な博物館などに寄贈して必要に応じてそれを利用していくということを考えていただくとよろしいのではないのでしょうか。仙台市科学館においても何人かの篤志の方から貴重な文献・資料を提供していただいております。

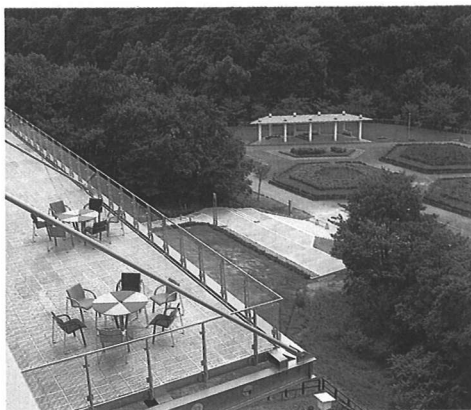
全体として参加型・体験型の展示を心がけているので解説パネルやガイドブックによる説明は最少限度にとどめ、オペレーションスタッフ(解説操作員)やパソコンに働きかけることによって期待した展示ガイドが得られるように多様な手段を講じています。オペレーションスタッフや社会教育指導員のほかに専門的な質問等には学芸員や指導主事が対応しています。



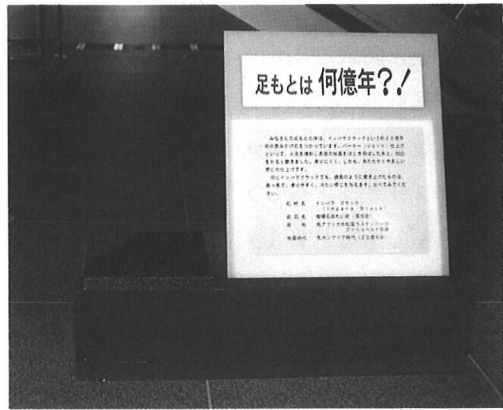
建物の概観(東側の正面入口から)
3・4階だけが見える



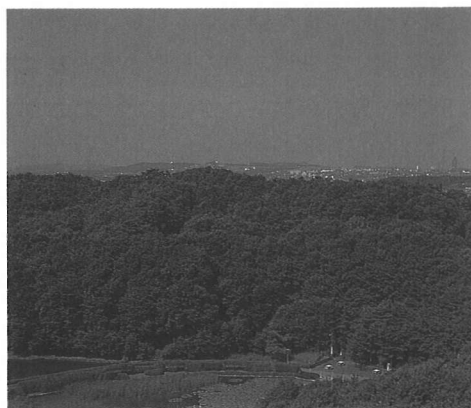
エントランスホール(エスカレーター前に
全長14m中国の竜脚類ダトサウルスを展示



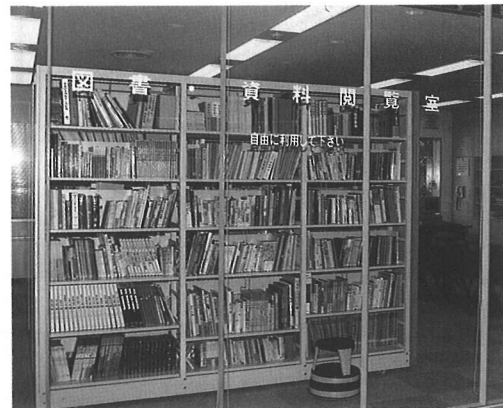
自然観察デッキ(左側)と森林公園の花壇



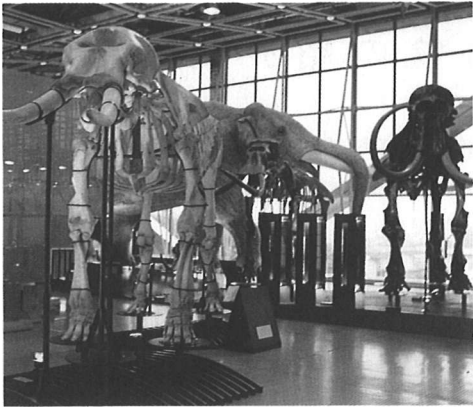
エントランスホールの床の石材の解説板



館内からの眺望した緑豊かな森林公園



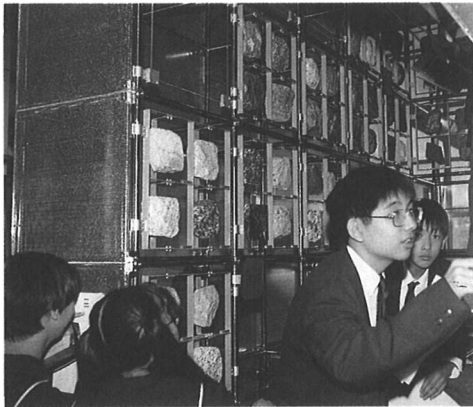
図書資料室



アフリカゾウの骨格，後ろ右からマンモス・ナウマンゾウ・シンシュウゾウ



センダイゾウ，左奥がシオガマゾウ
右奥はミヨコゾウのなかま



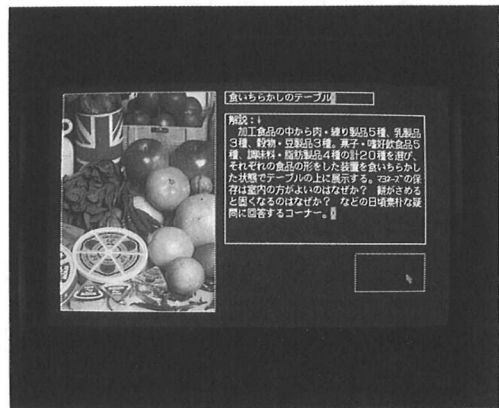
「岩石がいっぱい」のコーナーで
熱心に勉強中の中学生



展示ケースが机の代用になって，展示学習
などで評判がよい



岩石園。手前右泥かぶり(丸森産安山岩)，
中央鉄平石，左柱状節理の石越安山岩



全ての展示品の解説がひきだせるコン
ピュータシステムの端末